

大学を拠点とした子育て支援の取り組み

——大学と地域との連携促進モデル事業の活動報告——

岡田 由香¹, 高橋 弘子¹, 佐久間清美², 金尾 洋治³, 山口江利子¹,
神谷 摂子¹, 緒方 京¹, 志村千鶴子¹, 大林 陽子¹

Activity Report on Promotion of Infant Parenting Support in Cooperation between College and Community

Yuka Okada¹, Hiroko Takahashi¹, Kiyomi Sakuma², Yoji Kanao³, Eriko Yamaguchi¹,
Setsuko Kamiya¹, Miyako Ogata¹, Chizuko Shimura¹, Yoko Obayashi¹

この事業は平成19年度愛知県公立大学法人理事長特別研究費の交付を受けて行ったものである。事業の目標は同法人の中期計画である「地域連携」達成のための具体的目標として、以下の4点を考えた。①大学教員と学生との連携による育児支援における大学の地域開放 ②大学と地域との連携による育児支援におけるネットワークづくり ③子育てしやすい町づくりの推進力となる大学の地域貢献 ④将来、親となる学生への生きた教育現場の提供。

事業計画は守山区周辺の未就園児とその養護者の子育て支援ひろばとして、本学の体育館を地域に開放し（名称「子育てひろば もりっこやまっこ」）、学生や教職員、保育士・地域の保健師・子育て支援関係のNPO団体等との連携をはかり、ネットワークの確立をめざした。実際の活動は平成19年11月下旬から約3ヶ月間34回実施し、この期間に参加した親子は546組、1192人と多く、この地域の育児支援に対するニーズが高いことが示唆された。

キーワード：子育て支援、連携ネットワーク、大学の地域開放、大学の地域貢献

はじめに

少子化の急速な進行により様々な面で社会活力の低下がおきている。このことから母子保健領域では、子どもが健康に育つ、子供を産み育てることに喜びを感じることができる社会への転換が急務である。そのためわが国では、「すこやか親子21」「エンゼルプラン」「新エンゼルプラン」等で取り組んできたが、未だ少子化の波は食い止めることができず、平成16年に「子ども・子育て応援プラン」を打ち出し、少子化の流れを変えようとしている。

愛知県における少子化の流れは、合計特殊出生率（平成17年1.34）からみると全国で29位と依然低い状態である¹⁾。また、愛知県の児童虐待相談対応件数は上位10位以内に毎年あがり、深刻な子育て環境にあることがわかる¹⁾。名古屋市が子育て家庭8000世帯を対象に子育てに

関する意識・ニーズ調査を平成16年に行った（名古屋市子ども青少年局子ども未来部子ども未来課²⁾）結果、合計特殊出生率の低下理由として「経済的負担」の他に「身体的・精神的負担」を挙げた家庭が多かった。また、子育てしやすい社会をつくるために行政に何を期待するかの問いに、「経済的支援」の他に「多様な保育サービスの充実」「子育てしやすい町づくり」と子育て環境や子育てサービス面に多くが期待していた。そして、子育てサークルなどの自主的な活動について行政に行ってほしい支援として「活動場所の提供」「保健師などの講師の派遣」など子育ての場所の提供とともに専門家による支援の必要性がうかがえた²⁾³⁾。

以上のことをふまえ、愛知県における子育て支援の課題を検討した。その課題は、①地域での子育て支援のネットワークづくりをすすめること ②子育てしやすい町づくりを推進すること ③将来親となる子どもの豊かな心の育成をすすめること の3点が挙げられた。そして、

¹⁾愛知県立看護大学（母性看護学・助産学）、²⁾愛知県立看護大学（地域看護学）、³⁾愛知県立看護大学（生涯スポーツ）

これらの課題に対する具体的内容も検討した。①では育児不安や育児負担を共有できる相談相手や親同士の交流できる機会を増やす。親子にとって居心地のいい居場所づくりを進める。親だけでなく、地域や子育ての専門家が連携して子育てを支え合う保育サービスの充実をはかる。②では、緑豊かな自然の中で子どもが育つやさしい町づくりをすすめる。地域の中に安心して子育てができる世代間交流スペースを提供する⁴⁾。③では、開かれた大学との連携を図り、子育てボランティア活動への学生の参加を促進することなどを考えた。

本学が所在する守山区は名古屋市の東北部に位置し、豊かな水と緑に恵まれた自然環境のよさが特徴である。その面積は名古屋市16区中第3位と広く、人口も多く第4位、年間出生数約1800人で、人口・世帯の推移も年々増加し、名古屋のベッドタウンとして発展している町である。特にこの志段味地区は「志段味ヒューマン・サイエンス・タウン」として名古屋市がヒューマンサイエンスの研究開発拠点を中心とした21世紀の総合的まちづくりをめざしている地域である。この地域はこの数年で人口が約4万人と増え、特に子育て家庭世帯が急激に増えている。しかし、この地域の子育て支援サービスは追いついていないのが現状で、志段味地区の子育て支援施設として保育園は2カ所(守山区全22ヶ所)、幼稚園は1ヶ所(守山区全14ヶ所)、子育て支援センター0ヶ所(守山全2カ所)である。また、守山保健所や守山区民生子ども課主任児童委員が企画運営する育児教室や親子サロンは常に定員以上の参加がみられている。これらのことからこの地域の子育て支援のニーズは高いと考えられ、実際にこの地区在住の子育て中の母親たちからもニーズが高いことを本学の子育て支援サークルの活動をとおして確認しており⁵⁾、本学を拠点とした育児支援サービスを実施する必要性が高いことがわかった。

また、本学を育児支援において地域開放することは、看護職を養成している大学だからこそ、教員及び学生など健康を守る専門職が集い、親や養護者が安心できる場所になりえること、そして、本学は東谷山麓にあり、緑豊かな落ち着いた環境で、豊かな自然と共生しているキャンパスのため、親子がほっとでき、やさしくなれる場所であることなど意義が大きいことも考えられた。

以上のことから、本モデル事業の目標を大学法人の中期計画である「地域連携」達成のための具体的目標として、「子ども・子育て応援プラン」をベースに、愛知県公立大学法人理事長特別研究費の募集テーマである「連携」

をからめて以下の4点を考え、同法人理事長特別研究として交付を受けた。

1. 大学教員と学生との連携による育児支援における大学の地域開放
2. 大学と地域との連携による育児支援におけるネットワークづくり
3. 子育てしやすい町づくりの推進力となる大学の地域貢献
4. 将来、親となる学生への生きた教育現場の提供

方 法

理事長特別研究は単年度事業であるため、本モデル事業の目標の到達を視野に入れつつ、まずは活動実績の蓄積を図るための計画を以下のように考えた。

対象は、本大学の教員・学生と守山区志段味地域周辺の未就園の子ども(6ヶ月児から3歳の乳幼児)とその養護者及び子育て支援団体および関係者とした。

期間は、平成19年7月から平成20年3月。

取り組み内容としては、本大学の体育館(広さ約900平方メートル、平日の使用状況は「生涯スポーツ」の授業および夕刻からの学生のクラブ活動のみ)を志段味地域の子育て支援活動場所として開放する(「子育てひろばもりっこやまっこ」)。運営は平日指定日(週2日程度)午前10時から午後3時まで開放し、ひろばには絵本や木や布のおもちゃを用意し、湯沸かし室、授乳やおむつ換えのスペースを備え、居心地のよい居場所の提供をする。また、ひろばとして開放中は必ず保育士や教員が常駐し、学生ボランティアや子育て経験があるサポーターなど約10人のスタッフが毎回関わることとした。スタッフの構成メンバーは、連携ネットワーク(図1)となる①大学の教員(母性看護学・助産学教員、地域看護学教員、生涯スポーツ教員) ②育児サークルやNPO法人各団体 ③保育士 ④守山区の開業助産師 ⑤守山保健所志段味分室および担当保健師 ⑥守山区の社会福祉協議会 ⑦守山区在住の子育て経験がある育児サポーター ⑧育児ボランティア学生 等で構成した。事業を始める前にこれらの各関連機関に対し、事業の概要を直接説明し、理解と協力を求めた上で、チラシ配布の依頼をし、連携をはかった。

この事業の活動方針は、育児中の親または養護者が気軽に誰かと交流できる機会、相談相手がいない等の共通の悩みを持つ親同士が集まって交流を図り、教員や学生、

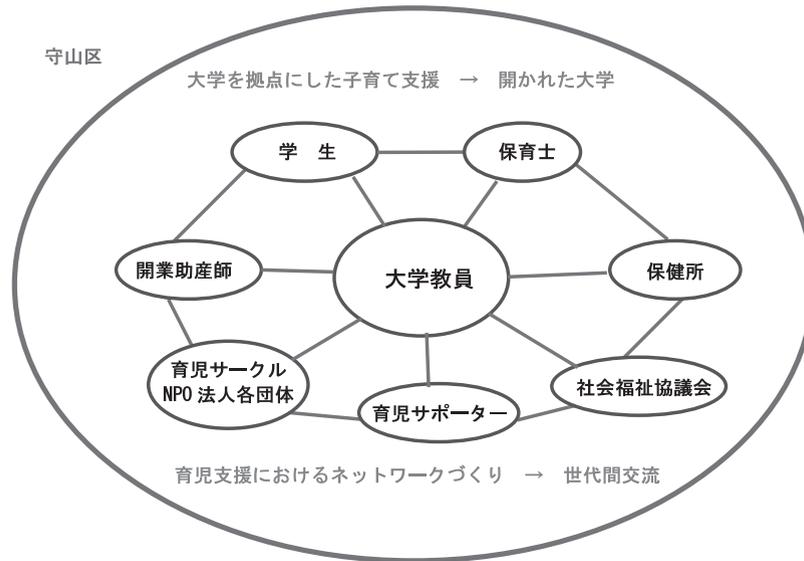


図1 本学を拠点とした育児支援における連携ネットワーク

保育士等それぞれがその親子をサポートすることで、それぞれの世代間交流が生まれ、本大学を拠点とした志味地域での育児支援ネットワークが形成されていくことを考えた。

結果および考察

1) 活動概要

活動実績は、参加者の居住地や子どもの年齢といった背景等を「子育てひろば」の活動日誌から抽出し、集計した。

実施期間：平成19年11月下旬から平成20年2月まで約3ヶ月間、通算34回 平日週2日（火曜日と金曜日）午前10時から2時間および午後1時から2時間。

参加者の背景（表1）：延べ1192人（内訳 養護者556人、子ども636人）の参加があり、参加した養護者は母親だけでなく父親や祖父母の参加も10人（1.8%）みられた。参加した子どもの延べ人数は636人で、年齢別にみると1歳が49.5%、次いで0歳が28.9%であったことから、この地域では低年齢の乳幼児を抱える親に子育て支援サービスの需要が高いことが窺えた。参加者の居住地は90%以上が守山区内で、近隣地域からの参加もあった。来所手段は90%以上が自家用車であったが、近い人は徒歩で参加していた。本学は公共交通機関が少ないため、幼い子どもを連れての参加には手軽さ、便利さが重要で、大学が有している駐車場を活用できたことも参加者の増

加につながった要因であろう。

わずか3ヶ月の短い実施期間であるにもかかわらず、回を追うごとに参加者が多くなり、2月は12回の開催で延べ623人が利用した。1回当たりの利用平均も11月の8.7人/回から2月では51.9人/回と約6倍に急激に増加し、この地域の子育て支援サービスの需要が高いことが窺えた。

活動運営に携わったスタッフ（表2）：保育士、本学の教員とも延べ100人以上の実動であった。しかし、ボランティアの参加は学生、一般ともに少なかった。学生は忙しい授業の合間をぬって参加していたが、今後は広報活動や運営日時を検討し、一般ボランティア（育児サポーター）、学生ボランティアとも参加を促すことが課題である。

2) 活動内容（表3）

(1) 出会い、ふれあうひろば：「自由ひろば」22回開催
（写真1）

「親子サロン」5回開催

これは親子や学生が出会い、自由遊びやリズム遊びなどをおしてふれあうひろばである。「親子サロン」ではリトミックの外部講師を招き「親子リズム体操」を開催した。

表1 平成19年度「子育てひろば もりっこやまっこ」月別活動実績

	活動回数	参加延数(人)	参加親子(組)	参加養護者(人)	参加した子どもの数(人)					参加者居住地				来手段		
					総数	子どもの年齢内訳					守山区内	近隣※	県内	県外	徒歩	車
						0歳	1歳	2歳	3歳	4歳						
11月	3回	26	12	12	14	2	7	4	1	0	11	0	0	1	0	12
12月	9回	175	79	79	96	40	41	9	6	0	77	2	0	0	9	70
1月	10回	368	170	175	193	53	97	19	24	0	164	4	2	0	12	158
2月	12回	623	285	290	333	89	170	31	42	1	249	23	13	0	16	268
合計	34回	1192	546	556	636	184	315	63	73	1	501	29	15	1	37	508
%						28.9	49.5	9.9	11.5	0.02	91.8	5.3	2.7	0.2	7.0	93.0
1回あたりの平均		35.0	16.1	16.3	18.7											

※「近隣」とは春日井市、尾張旭市、瀬戸市を示す
公共交通機関利用者1組あり

表2 平成19年度「子育てひろば もりっこやまっこ」月別関わったスタッフの背景

	活動回数	参加したスタッフ数								
		保育士	地域教員	母性教員	学生ボランティア*					一般ボラ
					1年	2年	3年	4年	院生	
11月	3回	12	3	14	0	0	0	6	0	0
12月	9回	24	5	33	4	7	8	10	2	7
1月	10回	32	3	24	3	0	4	3	0	0
2月	12回	40	7	34	7	0	4	0	0	0
合計	34回	108	18	105	14	7	16	19	2	7

*ボランティア計65人 (内 学生58人)



写真1

自由ひろば

掲載に関して了解を得ています

(2) 学び合うひろば：「育児講座」5回開催

親を対象とした子育て講座の定期的開催、子どもの年齢別講座の開催や学生の授業や演習の場所として活用することを企画した。ただし、今回は後者の実施までにはいたらなかった。

育児講座は生涯スポーツの金尾教授による「ママの体操」を2回開催し、小児看護学の服部准教授による「子どもの病気とホームケア」を1回開催した。また、学外講師（子育てNPO法人の代表者）による「子どもの安全プロジェクト」、「たたかず、甘やかさず 子育てするために」を開催した。育児講座の開催時は、託児付きでスタッフが子どもの世話をし、親や養護者自身のための時間を確保するように努めた。しかし、毎回30人以上の参加があり、6人程度の限られたスタッフでの託児は困

難であった。

(3) 育てあうひろば：「親子サロン」5回開催

子育て経験者と子育て中の養護者たちとの交流を企画することで、今回は子育て経験者である外部講師による絵本の読み聞かせ、親子で手作りおもちゃを作って遊ぶサロン（写真2）を実施した。

(4) 分かち合うひろば

子育て情報の提供や養護者たちによる情報誌の発行をすることを企画した。今回は情報誌の発行までにはいたらなかったが、「自由ひろば」の実施をとおして親同士、保育士や看護師同士、親と専門職との間で自由に意見交換が行われていた。

表3 平成19年度「子育てひろば もりっこやまっこ」内容別活動実績

活動内容	活動回数	参加延数 (人)	参加親子 (組)	参加 養護者 (人)	参加した子どもの数(人)					備 考	
					総数	子どもの年齢内訳					
						0歳	1歳	2歳	3歳		4歳
自由ひろば	22回	811	377	383	428	111	220	45	51	1	
育児講座	5回	167	76	77	90	35	42	6	7	0	学内講師延3人 学外講師2人
親子サロン	5回	185	84	85	100	37	42	8	13	0	学外講師5人
サークル支援	2回	29	9	11	18	1	11	4	2	0	
ボランティア 研修会	1回										参加15人(学生7人 教員8人) 学内講師2人 学外講師1人
ミーティング	4回										スタッフの参加 計29人
合 計	39回	1192	546	556	636	184	315	63	73	1	



(5) 支え合うひろば

保育士、保健師、助産師、看護師等の専門家による育児相談はひろば開放中に適宜行われ、育児サークルやNPO法人の拠点となる場の提供も2回実施し、守山区の双子親子サークルに活用してもらった。

(6) ネットワークをつなげるひろば：育児ボランティア研修会1回開催

育児サポーターやボランティア学生の育成をねらいとし、守山区社会福祉協議会から外部講師を招きボランティア活動の概念について講習を行い、学内講師による育児技術の演習を行った。

また、ひろばに関わる教員・保育士や子育て支援団体等の関係者が定期的に集い、ひろばに関する運営についてミーティングを行った。

3) 本事業の評価

今回の事業に参加した養護者や事業スタッフへ無記名自記式質問紙調査を行い、この事業の評価と今後の課題を明らかにした。

調査の対象は、平成20年2月に「子育てひろばもりっこやまっこ」に参加した養護者および事業スタッフとした。倫理的配慮として、回答は自由意志であること、回答しない場合であっても、一切の不利益を受けることはないことなどを文書にて説明し、回収箱への投函をもって同意とした。養護者については回答が得られた138人を分析対象とし、ひろばに参加したきっかけ、参加した理由、参加してよかったことを分析した。

(1) ひろばに参加したきっかけ (表4)

ひろばを利用したきっかけ (表4) に70%以上の人が「友達の紹介」とあり、口コミで広がっていることがわかった。わずか3ヶ月の短い実施期間の中で、広報活動はチラシ配布のみという限られた条件であったにもかかわらず、回を追うごとに参加者が多くなり、子育てに追われながらも携帯電話でのメール交換やインターネットの情報交換サイトなどの普及が背景となっていることが窺えた。

(2) ひろばに参加した理由 (図2)

最も多かった理由は「広い遊び場所」が70%近くで、次いで「子どもと外出できるきっかけ」「安全な遊び場所」「専門家との出会い」の順でみられた。

(3) ひろばに参加してよかったこと (図3)

最も多かった内容は「広い遊び場所」が60%以上で、次いで「安全な遊び場所」「子どもと外出できるきっかけ」「遊具の充実」「屋内の遊び場所」の順でみられた。

ひろばに参加した理由や参加してよかったことの上位の内容はいずれも同じであったことから、今回の子育てひろばを利用した養護者の需要と供給は一致していたことが窺われた。また、この地域での安全な遊び場所の確保に養護者が苦慮している姿もみえてきた。

(4) 参加した親からの声、関わった学生ボランティア・保育士からの活動をとおしての自由意見 (表5)

参加した養護者からの自由意見により、「子どもが喜んで遊ぶ姿をみるとうれしく、育児は楽しいと感じた」「親がリフレッシュでき、親子とも家に帰ると落ち着き、怒らなくなった」とあり、この事業が親子にとって気軽に誰かと交流できる機会になっていること、安心して安全な遊び場所になっていること等が確認された。そして、「保育士、学生ボランティアなど、多くのスタッフが親切にサポートしてくれるので、とても安心できた」「気軽に相談できる保育士や助産師が常についてくれた」との声も聞かれ、この事業の目的である子育て支援ネットワークが形成され、養護者の求める支援の一端を担えたことが窺えた。

教員や学生、保育士等それぞれが連携し、親子をサポートしてきたことで、養護者が子どもの姿を客観的に見て、リフレッシュでき、育児が楽しいと感じる育児支援が提供できていることは何よりも評価できる。

また、学生の自由意見から子どもと触れあうことによって、子どもの成長発達を日ごろの学習に関連させて深められることや地域の人々や活動メンバーとの関わりをとおして対人能力の向上を目指せる⁶⁾ ことなど、保健医療を学ぶ学生にとっては実体験から貴重な学習機会を得ることができていた。

表4 ひろばに参加したきっかけ (複数回答)

	人(%)
友達の紹介	116(72.5)
保健所の紹介	17(12.3)
チラシ	24(17.4)
その他	4(2.9)

n=138

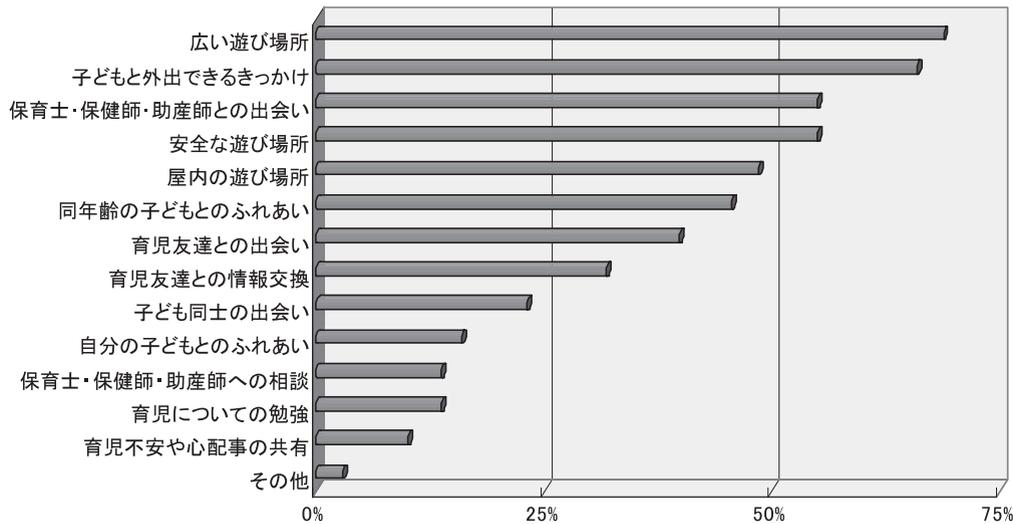


図2 「子育てひろば もりっこやまっこ」に参加した理由（複数回答）n=138

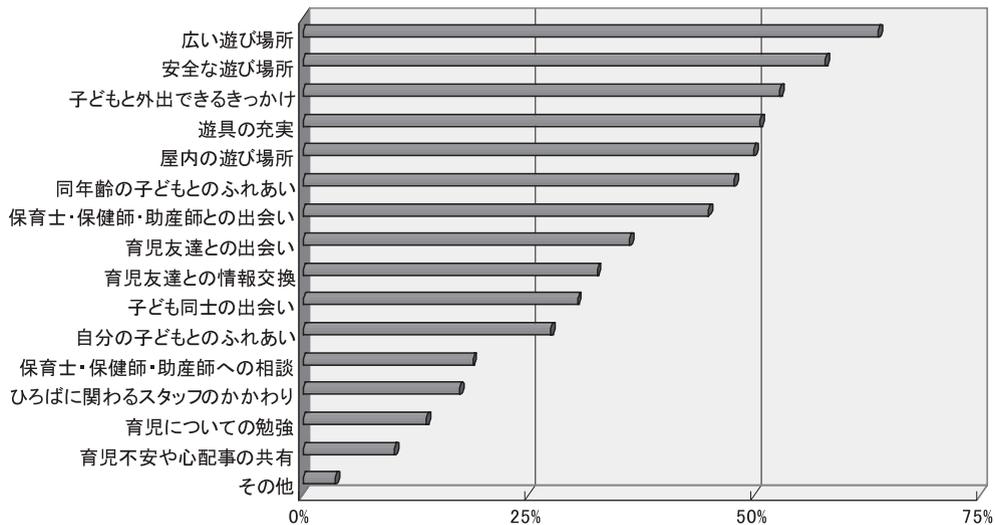


図3 「子育てひろば もりっこやまっこ」に参加してよかったこと（複数回答）n=138

保育士の自由意見にもあるように、親子が自由に遊ぶ場として、地域でのつながりが強くなる場として体育館を開放することは、開かれた大学となり地域貢献を担う役割を果たすことが可能である。さらに、システム全体で地域の子育て支援を包括的にみまもることが可能となり、子育てしやすい地域づくりと地域に向かっての大学の専門的機能を生かせる機会となる。そして、大学のもつ資源を地域の子育て支援に活用することは、学生の教育効果を高める機会としても有用である⁷⁾。

今後の課題としては、事業を利用した養護者や事業ス

タッフから事業の継続性、安定性が求められているため、引き続き事業を継続し充実化をはかり、事業の目標到達のためのさらなる展開が必要である。

まとめ

本事業をとおして、大学の地域開放、大学と地域との連携による育児支援ネットワークが形成され、大学における地域貢献の実績を積むことができた。今後の課題として、事業を利用した養護者や事業スタッフから事業の

表5 「子育てひろば もりっこやまっこ」の活動をととして

 <参加した親からの声>

- ・遊具、ひろばのスペースともに充実していて安心だった。
 - ・スタッフ、施設ともに満足している。
 - ・お母さん方と友達になり、いろいろな情報を聞くことができた。
 - ・保育士、学生ボランティアなど多くのスタッフが親切にサポートしてくれるのでとても安心できた。
 - ・気軽に相談できる保育士や助産師が常についてくれた。
 - ・子どもの姿を客観的に見る事ができた。
 - ・子どもが喜んで遊ぶ姿をみるとうれしく、育児は楽しいと感じた。
 - ・親がリフレッシュでき、親子とも家に帰ると落ち着き、子どもに怒らなくなった。
 - ・育児講座は子どもをスタッフが見てくれ、自分の時間をもつことができた。
 - ・この地域は児童館や公園などの施設・設備がないので助かる。
 - ・開催曜日を増やしてほしい。
 - ・ぜひこのひろばを長く続けてほしい。
-

<学生ボランティアの声>

- ・子どもたちがとても可愛く、一緒に遊んだことが楽しかった。
 - ・子どもと関わるのは難しいが、ふれあうことで癒された。
 - ・子どもの発達段階を実際に目で見る事ができ勉強になった。
 - ・保育士や教員の親子への接し方、関わり方が参考になった。
 - ・育児中の親から、いろいろな話を聞くことができよかった。
 - ・大学の施設が有効に使われ、地域とも交流できるのがよいと思う。
 - ・学生の育児サークル活動を発展、充実する必要がある。
-

<保育士の声>

- ・親子が自由に遊ぶ場として、また、地域でのつながりが強くなる場として体育館を開放することはよいと思う。
 - ・子どもが就園前の親たちの悩み・ストレスが多いことを実感し、この企画の必要性をととても感じた。
 - ・参加者が多い場合や託児をする際のスタッフの充実が課題である。
-

継続性、安定性が求められているため、引き続き事業を継続し、子育てしやすい町づくりの推進力となる大学の地域貢献および将来、親となる学生への生きた教育現場の提供をはかっていく必要がある。

おわりに

この事業は平成19年度理事長特別研究費の交付を受けて行ったものである。このモデル事業をととして大学外での人的ネットワークが誕生し、人と人が連携することの意味や大切さを感じる事ができた。教育業務の傍らに事業に携わったため十分ではなかったが、この事業の活動スタッフに助けられ、支えられて活動を進める事ができた。この事業の生みの苦しみを皆で分かちあい、ひろばで生き生き楽しそうに笑っている親子の姿を見ることが、この事業を続ける原動力となっている。今後は、新県立大学設立にむけて連携する範囲を拡大し、その活動分野を発展させていくことも視野に入れ、さらなる大学と地域との連携が生まれ、開かれた大学として地域貢献が期待できると考える。

この事業に携わってくださった本学の教員と職員、保育士、外部講師の皆様には深謝いたします。

参考文献

- 1) 厚生労働省児童家庭局著：母子衛生の主なる統計 平成17年，2005.
- 2) <http://www.city.nagoya.jp/shisei>，名古屋市子ども青少年局子ども未来部子ども未来課，2005.
- 3) 布原佳奈，大野純里，岡田由香，高橋弘子：未就園児をもつ母親のサークル参加に影響する要因。第8回日本家族看護学会，2001
- 4) 野々垣智子，山下恵，岡田由香：育児中の母親が思う異世代女性からの育児支援——地域内での育児支援を促すためのネットワークづくり。第21回愛知母性衛生学会学術集会，2003.
- 5) 對木聖恵，岡田由香：看護学生ボランティアによる家庭育児支援の意味。第48回日本母性衛生学会，2007.
- 6) 恵美須文枝，鈴木享子，高橋弘子，岡田由香：育児支援ボランティア提供者の活動に対する評価。第15回日本保健科学学会学術集会，2006.
- 7) 高橋弘子，岡田由香，恵美須文枝：看護学生のボランティア志向性に関する実態について——育児支援ボランティアを中心に——。第20回日本助産学会学術集会，2006.